MEIJIMURA

明治村だより

Vol.87 2017 Spring

長崎居留地二十五番館にみる塗装技術 …… 2
語り継ぐ建築 …… 5
錦絵で見る明治時代 …… 6
春の催しもの …… 8
A La Meiji-mura …… 10
春の花を楽しもう …… 裏表紙

春の花を楽しもう

四季折々、様々に表情を変える明治村。春は村内各所でいろいろな植物が美しい花を咲かせます。

※気候により、開花時期が変動する場合があります。

月	3月	4月			5月		
旬	下	上	中	下	上	中	下
アセビ							
シダレザクラ							
ボケ							
カタクリ							
ショウジョウバカマ							
ソメイヨシノ							
コバノミツバツツジ							
ヤエザクラ							
ユキヤナギ							
レンギョウ							
モクレン							
コブシ							
ヤマザクラ							
サツキツツジ							
モチツツジ							
ドウダンツツジ							
アメリカハナミズキ							
ツツジ							
ヒトツバタゴ							
ヒラドツツジ							
フジ							
ハナショウブ							
アジサイ							

西園寺公望別邸「坐漁荘」が重要文化財に指定されました。

指定内容：主屋、警衛詰所、供待及び門　附資料　棟札、御幣軸、主屋附塀
指定理由：近代の政財界人が海浜保養地に建てた別荘建築の中で数少ない遺構であり、竹材や杉皮等をふんだんに採り入れた数寄屋意匠の代表的な近代和風建築である。
指 定 日：平成29年2月23日

〈表紙〉
タイトル　紺碧の内閣文庫
撮 影 者　丹羽祥方
（平成24年度 明治村写真コンテスト入選）

内閣文庫
建築年　明治44（1911）年
設　計　大熊喜邦

平成29年3月10日発行
「明治村だより」第87号（平成29年 春）

発　行　博物館明治村
〒484-0000　愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314
http://www.meijimura.com

製　作　大日本印刷株式会社

『明治村 だより』 第88号発行のお知らせ
発行時期　平成29年6月中旬（予定）
申込方法　「明治村だより」第88号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料（含発送手数料）140円とともに現金書留にてお申し込み下さい。

長崎居留地二十五番館にみる塗装技術

一、はじめに

長崎居留地二十五番館（以下、二十五番館と略記）は、明治二十二（一八八九）年に建てられた本館と明治四十年代に建てられた別館からなる住宅建築です。旧所在地は、長崎居留地の南山手地区で、昭和四十一（一九六六）年に博物館明治村へ移築されました。この度、平成二十七年十二月より屋根替、部分解体修理工事に着手し、現在工事は順調に進捗しております（注1）。

本稿では、この二十五番館にみられる塗装について、これまでの調査により判明したことを中心に紹介します。

二、二十五番館にみる塗装の特徴

二十五番館は、別館東面の縁側、座敷周りを除いた木部に塗装が施されています。現在（今回の修理前の状態）の表層に現れている塗膜は、移築時、あるいは移築後における修理時に塗替えられたものです（注2）。

写真1　建物外観（修理前）

建物外部では、創建年代の異なる本館、別館とも、外壁下見板がクリーム色に塗装されており、外観はこの色が基調とされています（写真1）。一方、軒先の化粧裏板、ベランダの天井部分は白色で塗り分けられており、外壁との濃淡がアクセントとなっています（写真2）。また、上げ下げ窓や鎧戸といった建具とその周囲、本館隅の付け柱などには、明治時代における特殊な塗装技法である杢目塗（もくめぬり）が施されており、外観をひときわ特徴付けています（写真3）。

写真2　本館バルコニー（修理前）

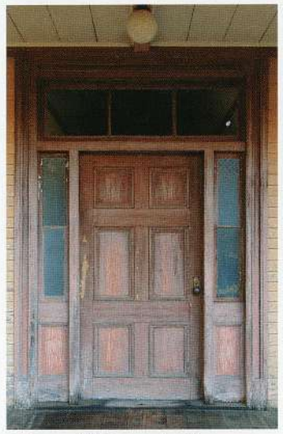


写真3　本館入口の杢目塗

一方、建物内部は、本館、別館ともに建具周りに加えて、幅木、飾り長押、廻り縁といった造作材に、杢目塗が施されており、木部における塗装の仕上げが統一されています（写真4）（注3）。

「杢目塗」とは、一般的に、木材の杢目の模様を描いた塗装（graining）を示すもので、木材や金属に板目や柾目（まさめ）の杢目模様を描き表す塗装技法です（注4）。杢目塗は、明治初期から、汽船、灯台及び附属官舎、官庁舎、教会堂建築に使用された例が確認されており、明治村内においては、菅島燈台附属官舎（明治六年）、東山梨郡役所（明治十八年）、三重県庁舎（明治十二年）などに類例をみることができます（注5）。

写真4　本館No2室の内観（修理前）

三、塗膜調査の手法

今回の修理工事に際して、二十五番館の既存塗膜の調査として次の四つの調査を各部位において実施いたしました。1、摺り出し調査、2、剥離（はくり）調査、3、断面写真撮影調査、4、色彩調査です。摺り出し調査は、細かい目のサンドペーパーを使用して既存の塗膜を上から順番にペーパー掛けすることで、下層の塗膜を段階的に現して調べる物理的な手法です。一方、剥離調査は、薬品を使用して上層の塗膜を弱めて、ヘラなどでこれをすき取り下層の塗膜を現して調べる化学的な手法といえます。また、断面写真撮影、色彩調査は、サンプリングした塗膜の断片、固まりについて行う分析調査です。実際には、摺り出し調査を基本とし、他の手法を複合的に併用して各部位の塗膜を調べました。

さて、ここで断っておきたいことが、前記の調査だけで、建物に施された塗装の変遷のすべてがわかるわけではないということです。なぜなら、摺り出し調査や剥離調査は、すべての種類の部材の、すべての部分に対して適用できる手法ではなく、既存塗膜の消失を抑えるためには、最低限の範囲で選択して行われるべき調査だからです。また、ある時代において、部分的に塗装の修理が行われていること、過去のある時点の塗膜が何らかの理由で消失している可能性も考えられます。したがって前記の塗膜調査は、建物の古写真や文献調査、修理履歴などから得られる情報とあわせて、調査結果の分析・考察を行うことが理想となります。

二十五番館の場合、残念ながら古写真、創建当初の仕様書などの文献が乏しく、現時点では、これらからの情報は得ることができておりません。したがって、各調査結果をもとに判明した事実と、そこから導かれる推察を明確に区分する必要があります。以下、建物の主要部分における調査結果と考察について記します。

四、調査結果と考察

外部下見板の塗装

建物外部の塗装について、本館の下見板とベランダの柱頭、別館の下見板の塗膜について摺り出し調査を行いました。摺り出し調査の結果、各箇所における塗膜層の数は同じでした。したがって、この範囲内では塗装修理の回数が均一であることがわかります。

そこで、特に本館下見板の塗膜サンプルについて、光学顕微鏡による断面写真撮影を行いました（写真5）。断面写真をみると、塗膜の層は、木地から数えて、白(a)→クリーム色①(b)→クリーム色②(c)→黄緑(d)→クリーム色③(e)→クリーム色④(f)→白(g)→クリーム色⑤(h)の計8層で構成されていることがわかります。

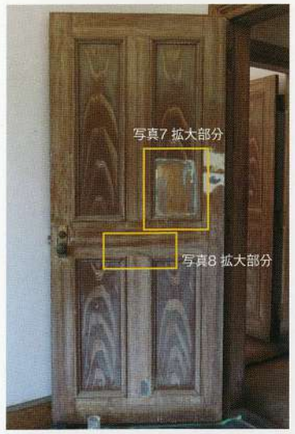


写真6　本館No4室片開扉剥離調査

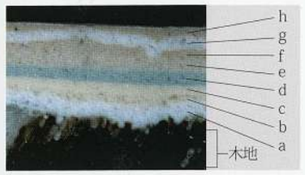


写真5　本館下見板サンプルの塗膜層

修理履歴より、外壁は昭和五十四年と平成四年に塗り替えられていること、白色は下塗りの層と考えられることから、移築後の修理時における層がクリーム色④及び⑤、移築時の層がクリーム色③となり、黄緑色の層は移築前のある時期における仕上げの層であること、また、最下層のクリーム色①の層は、残された塗膜の層の数からは、創建時まで遡るとは断定はできないものの、少なくとも移築前における一番古い時代の仕上げの層であることがわかります。

杢目塗

杢目塗が施されている部分の内、建物内部の扉の鏡板、建具枠、幅木などを対象に摺り出し調査、剥離調査を行い、各所で最下の仕上げの塗膜に杢目塗の塗膜があることが確認されました（注6）（写真6、7、8参照）。しかしながら、発見された杢目塗の仕上げ塗膜は、いずれも塗膜が極端に薄く、調査により塗膜の全容を現すことは適いませんでした。このため、いたずらに古い塗膜層を傷つけないためにも、塗膜調査の範囲を最小限の範囲に留めることとしました。杢目塗の塗膜調査を行った箇所を図1に示します。

写真7　本館No4室片開扉鏡板　拡大

写真8　本館No4室片開扉腰框　拡大

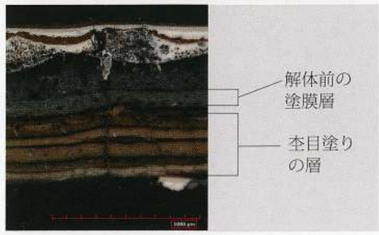


写真9　ベランダ鎧戸ー塗膜断面写真

一方、建物外部は、ベランダ鎧戸の塗膜をサンプリングし、断面写真撮影を行いました（写真9）。ベランダの鎧戸は、断面写真をみると、数多くの仕上げ層が確認されることから、建物内部よりも多く、塗装修理が繰り返されたと考えられます。鎧戸は、移築後の昭和五十四年

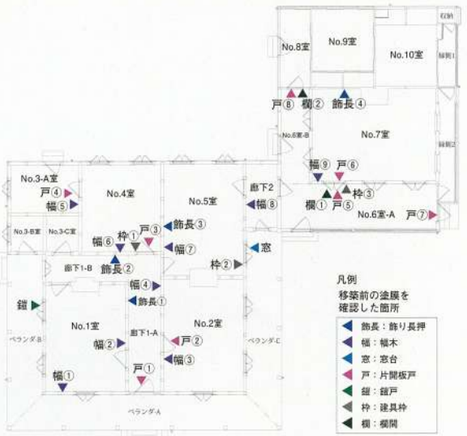


図1　塗膜に関する摺り出し調査を実施した位置図

に塗装修理を受けていることを考慮すると、これらの塗膜層の内、中間に位置する緑色の層が解体前の塗膜層と考えられ、これ以前の層で杢目塗と考えられる仕上げの層が少なくとも五層あることがわかります。

建物内部で発見された最下の杢目塗仕上げは、杉材などの針葉樹の銘木に見せて中杢（なかもく）、玉杢（たまもく）、柾目等、多様な杢目模様が緻密、かつ豊かに表現されています（注7）。これらの緻密な杢目塗は、常にいくつかある塗膜層のうちの最下の仕上げ層として現れ、その下層は下塗りを経て木地となります。上記の点と、解体前の仕上げ層の数、および杢目塗が用いられた類例建物（写真10）の創建年代を考慮すると、発見された杢目塗は、本館、別館のものともに創建時に近い時代、少なくとも明治期にまで遡ると考えられます。また、発見された杢目塗について本館、別館の各部位に着目すると、明治二十二（一八八九）年の本館部分は、各扉の鏡板、中框にとりわけ手の込んだ笹杢、中杢などの板目が描かれており、扉の竪框（たてがまち）、扉枠、窓周り、幅木等は非常に細かい柾目の表現で統一されています。一方、明治四十二（一九〇九）年の別館は、扉の鏡板も、幅木などと同様の細かい柾目が描かれており、時期を隔てて各部位における杢目の表現に変化がみられることがわかりました。

写真10　明治村内の類例建物杢目塗が用いられた扉（左から菅島燈台附属官舎、東山郡役所、三重県庁舎）

ここで、発見された杢目塗の技法について、観察から得られる情報をもとに工程の順を追って考えてみます。まず、本館の扉の鏡板、中框にみられる板目の杢目塗についてです。

①下塗りを行う。②杢目の素地となる色を中心から周辺に向けて淡くグラデーションを付けて塗る。③いわゆる杢目について、中心に近い部分では、蒔絵筆のような極めて細い線を描くことができる筆を用いて杢目を描き、周辺に近い部分では、細かな櫛目の付いた道具を用いて上塗りされた塗料を掻き取るように描く。④最後に、毛足の長い刷毛で軽く撫でて、細かい刷毛目を付け、木の肌の質感を出す。

一方、柾目の杢目塗は、上記の工程のうち③の工程を簡略化したもので、素地となる下塗りの塗膜が乾燥した後、上塗りを行い、櫛状の道具を用いて、掻き取るように柾目の杢目を描き、所々で波打つような表現を加えます（注8）。

以上が、発見された杢目塗の塗膜面を観察して得られる技法的考察です。杢目塗の施工にあたっては、塗料を複数回塗り重ねる必要があり、それぞれの段階において、使用する塗料の粘度や色の調合が、施工環境下に応じて選択され、塗料の乾燥具合が適宜調整されていたと考えられます。いずれにせよ、杢目塗の表現は、塗装する職人の美的感覚あるいは描写力に負うところが非常に大きい技法であるといえます。また、緻密な板目を描くことは細かい柾目を描くことよりも、より多くの工程を経る必要があり、創建年代の下る別館において板目を描いた杢目塗が下層から発見されず、すべて柾目の表現にとどめられているという点は、杢目塗の技法的変遷を考える上でひとつの手がかりとなりそうです。

しかしながら、前記の工程を忠実にたどったとして、果たして同じような杢目塗を再現できるか否かという問題は、現代の塗装材料、また塗装技能に関わる別の問題として考えなくてはなりません。また、当時どのような道具が実際に使われていたかについての詳細も、さらなる調査が必要です。

五、まとめ

これまでみてきたように、長崎居留地二十五番館の塗装は、解体前のある一定の期間を除き、残された塗膜の最下の仕上げ層の色調や技法から、大きく離れることなく修理が重ねられ、移築時にもこれを踏襲して復原されたことがわかりました。最下の仕上げ層から移築時、その後の修理時までの塗膜層の数は、調査箇所によって異なっており、解体以前も部分的な塗装修理が行われていたことが推察されます。外壁の塗膜から得られる黄緑色の層、鎧戸の塗膜から得られる緑色の層は、建物の外観が建具周りなどを緑、下見板を黄緑としていた時代があることを示唆しています。一方、建物内部は、部位に応じてブルーグレーや深緑の異なる色の中間層が発見されていることから、室に応じて塗装の仕上げが変えられていた時期があったと考えられます。建物内部の各所に残された最下の杢目塗仕上げは、総じて移築時以降の杢目塗よりも緻密に描かれており、高い技法が用いられた明治期の塗膜として希少かつ貴重です。今後、修理工事の中で、発見された塗膜の保存、最下層の杢目塗についての技法的復原修理の検討を進めていく予定です。

注釈

（注1）修理工事は、平成三十三年三月迄を予定としております。

（注2）長崎居留地二十五番館は、昭和五十四（一九七九）年、平成四（一九九二）年に塗装の部分修理が行われていることが、明治村年報などの資料よりわかっています。

（注3）本館、別館とも暖炉枠の木部は、深い飴色を基調とした漆塗、またはニス塗が施されており、他の木部とは異なる仕上げとなっています。本稿においては紙面の都合上、暖炉枠についての記述は省略します。

（注4）『建築大辞典』縮刷版　第一版　彰国社　一九七七。木目模様を塗装する手法は、木目塗や杢目塗と称されます。二十五番館の木目塗は、銘木のように意図的に豊かな木目が表現されていることから、本稿においては「杢目塗」と記述します。

（注5）明治時代における杢目塗の事例について、汽船では、工部省燈台視察船であった明治丸（明治六年）、灯台では、釣島灯台旧官舎に確認されています（『重要文化財明治丸保存修理工事報告書』文化庁　一九九一、『松山市指定文化財　釣島灯台旧官舎』松山市　一九九八）。また杢目塗に使用された、塗装材料は必ずしも油性調合ペイントだけではなかったと考えられ、水彩塗料やワニスなども同様に用いられたものと考えられます。

（注6）剥離調査では、剥離剤を使用して既存の塗膜を一層ずつ均一に剥がすことを目指しましたが、各層の塗膜面に凹凸があることや、周囲の温湿度等が剥離剤の効果に微妙に影響を及ぼすこともあり、調査は困難を極めました。したがって今回、得ることができた最下層の杢目塗の塗膜は、ある意味偶然の産物であり、この点においても貴重な資料といえます。

（注7）杢目塗をほどこす目的は、母材である木材の見た目の等級（節を避けるなど）を塗装技術によって上げること、あるいは南洋材、広葉樹の木材に特にみられる玉杢などの珍奇な杢目を塗装技術によって得ることであったと考えられます。二十五番館では、母材は一般等級の節のある杉材の板目ですが、描かれている杢目は杉の笹杢、あるいは中杢を目指したものと考えられ、母材の等級を塗装技術によって上げようとした意図が窺えます。

（注8）移築時、また移築以降の修理時における杢目塗は、中塗りまで施された下地に、上塗り塗装を一様にかけ、上塗りの塗装が乾ききらないうちに、ゴムへらなどの道具を用いて、上塗りの塗膜を掻き取ることで描かれていたと考えられます。

博物館明治村の活動にご支援いただいた方々

名古屋鉄道株式会社
株式会社メイテツコム
株式会社エムアイシー

安藤　正人　吉村　俊哉
小林　正佳　中井　卓治　吉田　歌子
加藤　洋介　江河　亨　横井　良憲
鈴木　典子　阪西　裕子　横井碩之介
有田　圭介　森　啓成　青木　治夫
川上　里佳　宮崎　隆司　高柳　昌己
中野　敦之　田中　啓業　大橋　和也
山口　博史　吉村　友男　斉藤　嘉明
安田　章宏　秋田　幸哉　小栗実佳子
坂井田　豊　三浦　嘉幸　佐々木文子
小島　保俊　荻島　泰裕　倉橋　和瑚
竹中　隆礼　加藤　聡　堀　いく子
髙井　弘　橋詰三友理　立石　恭平
土方由美子　森下　昌英　立石　春美
井桁　直子　吉田　典保

平成29年2月末現在
（順不同　敬称略）

『長崎居留地二十五番館』保存修理工事寄附募集要項

保存修理工事のためのご寄附のご協力をお願いいたします

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊寄　附　要　項＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

事業名称／長崎居留地二十五番館 保存修理工事
受付期間／平成29年3月1日 ～ 平成30年2月末日まで （第3期）
寄附方法／1口 ＝1万円 （口数はご随意）

※詳しくは下記へお問い合わせください。
〒484-0000 愛知県犬山市字内山1番地　公益財団法人明治村 寄附担当
TEL：0568-67-0314 FAX：0568-67-0358 URL：http://www.meijimura.com/

2018年は明治150年

錦絵で見る明治時代

1868年に「明治」と改元され、間もなく150年を迎えます。これまでもこの紙面で、錦絵を通して、「人々や街の様子」から、江戸から明治への時代の移り変わりを紹介してまりました。今回は、今は皆さんが当たり前に使っている「鉄道」開業当初の様子を描いた錦絵をご紹介いたします。

東京高輪海岸蒸気車鉄道図

明治四(一八七一)年　三代広重

鉄道建設工事は明治四年三月に開始され、線路の敷設は明治五年二月に完成しました。高輪付近（現品川あたり）は旧薩摩藩や兵部省（陸軍）からの反対があり、陸上での敷設が難しく遠浅の海岸を埋め立て、海上に築堤し、その上に線路が敷かれました。幅は平均六・四メートル、長さ二・七四キロメートルの線路が海上に登場しました。この絵が描かれたのは明治四年、つまり鉄道開業の前年にあたり、この時点ではまだ蒸気機関車は走っておらず、想像で描かれているようです。

東京高輪海岸蒸気車鉄道図

では、細部を見てみましょう。

おっと危ない。橋のすぐ下に線路が描かれています。どう見ても橋と汽車がぶつかってしまいそうですね。実際には機関車と橋がぶつかることはありませんでした。この橋は東海道と線路を立体交差させるため、明治五年に架けられた日本初の跨線橋である八山橋です（図1）。現在もその名とともに、親柱も残されてます。この橋は後に蒸気機関車見学の絶好の場所となり、見物人が絶えず、多くの錦絵にも描かれています。

今は、観光地ともなっているお台場。も

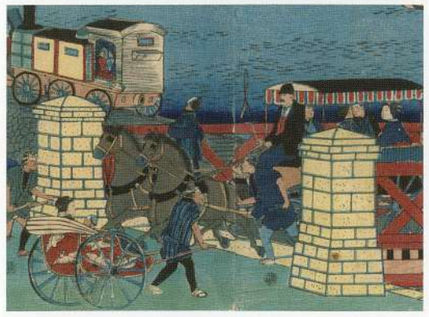
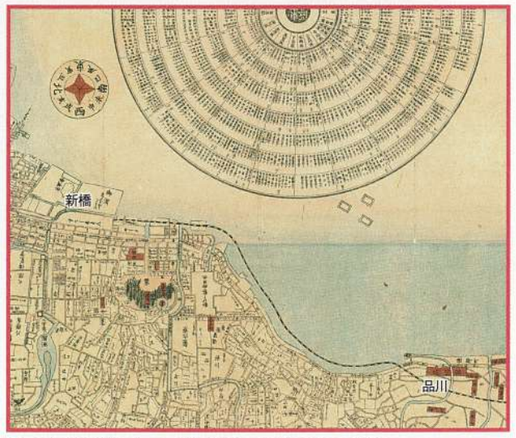


図1



改正 東京区分絵図　全(児玉彌七　明治12(1879)年)

ともとは江戸末期、外国船を打ち払うための砲台場で、近くの御殿山の土を削り取って作られた人工島です（図2）。御殿山は室町時代には太田道灌の館があり、江戸時代は桜の名所で江戸湾が見渡せました。しかし台場造成に伴い、鉄道を通すためにさらに削られ現在は小さな山になっています。

画面中央上部にある燈台はフランス技術者の手によって、品川沖第二台場の西端に建てられた洋式燈台「品川燈台」で、現在は明治村に移築されています（図3）。明治三（一八七〇）年に点燈され、海面上五二尺（約一六メートル）で、光は約一八キロメートル届いたと記録されています。外洋に面していませんが、当時外国人の居留地と定められた築地（東京）と横浜を結ぶ航路の安全を確保するために必要とされ、日本で三番目に設置されたものです。

図2

図3

画面左端に小さな橋が見えますね。これは内海と外海をつなぐための水路に架けられたもので、目立つ橋だったのかこれも多くの錦絵に描かれています（図4）。海に面したところに描かれてますが、現在の泉岳寺トンネルにあたり、今もその半分が残されています。泉岳寺トンネルは正式名を高輪橋架道橋といい、高輪と港南をつないでいます。内部は一方通行で、天井の高さはわずか一・七メートルという小さなトンネルです。

続いて人に注目してみましょう。洋服を着ている人、和服の人、仕事着の法被を着ている人などが入り交じっていますね。

江戸時代に活躍した手紙、荷物などを配達する飛脚がいます（図5）。郵便制度が整うのが、まさにこの絵が描かれた明治四年で新しい制度がまだ普及していなかったのでしょう。棒の先に赤い紙が付いているのは速達を表しています。

赤い布をマントのように羽織っている人がいます（図6）。彼が羽織っているのは、明治初年に大流行した、輸入品の毛布です。輸入品の毛布は真紅の地に黒い線が入ったデザインのものが多く、赤いブランケットから「赤ゲット」と呼ばれ、東京見物の旅行者がこの赤い毛布をよく羽織っていたことから、「赤ゲット」は「田舎物」「おのぼりさん」の代名詞となりました。隣にはザンギリ頭でステッキを持ったハイカラな男性が対象的に描かれています。

黒いコートを羽織っている人もいます（図7）。これは「とんび」とも呼ばれ、幕末にヨーロッパからもたらされたインバネスと言われるコートをもとに防寒、防雨兼用で開発されたものです。

手拭を被った人もいます（図8）。この被り方は「米屋被り」と名付けられており、米屋・搗き屋などが精米作業中に頭に糠がかかるのを防ぐために、頭をすっぽり覆うものです。

続いて、肝心の機関車を見てみましょう。

車輪が、大八車の車輪のように外側に付いています。また蒸気機関車の向きも変ですね。そうです。機関車の前後が逆になっています。稀に機関車の向きが変えられない場合、この図のように運行することがあります（プッシュ運行）が、そうだとするならば煙のたなびく方向が逆ですね。煙が右側へたなびいていればプッシュ運行している様子といえますが、この状態は、やはり実際に蒸気機関車が運行する姿を目にしていない人が描いたものと考えられます。

派手な鶴が描かれた人力車にお母さんと子どもが乗っています（図9）。明治時代の初めに、人力車の車体に色漆や蒔絵で山水花鳥人物、紋様、武者絵など様々な絵模様を描くことが流行しました。

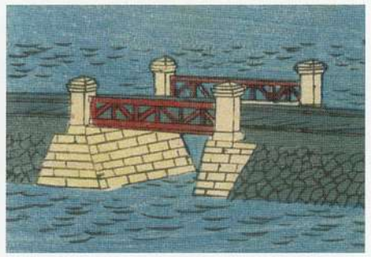


図4

図5

図6

図7

図8

図9

春の催しもの 3▶6月

明治探偵GAME

怪盗遊戯

謎を解いて怪盗に立ち向かえ！ 3.4 Sat. → 7.23 Sun.

舞台は明治時代のとある探偵社。そこに届いた1通の挑戦状から事件は動き出す！あなたは、明治小五郎の指示の元、わずかな手がかりをもとに明治村内を捜査し、怪盗が巻き起こす難事件を解決しなければならない――。
大人の方からお子様まで、ファミリー、カップル、お友達同士で楽しめる謎解きに、さぁ挑戦！

<ストーリー>
奇妙な出来事や事件が多発していた明治時代に、突如現れた一人の男がいる。彼の名は「明治小五郎」。卓越した推理力で数々の難事件を解決へと導いた名探偵である。そしてもう一人、同じ時代に生を受け、小五郎とは全く異なる道を選んだ謎の人物がいた。その名は「怪盗ジダイ」。狙った標的は逃がさない、世間を賑わす大泥棒である。そして今、怪盗ジダイから小五郎の明治探偵社に挑戦状が届いた。「探偵諸君、ご機嫌よう。退屈な事件ばかりで飽き飽きしていないかね？我輩が飛び切りの娯楽を提供しよう。さあ勝負といこうじゃないか」ジダイはこれから6つの事件を起こすという。あなたは小五郎とともに全ての事件を解決することができるのか！？

"挑戦状"は難易度別に、6コースをご用意。あなたはどれから挑戦する！？

大人の方からお子様まで、ファミリー、カップル、お友達同士で楽しめる謎解きに、さぁ挑戦！

挑戦状 W 300円
難易度0.5 ★★★★★
小学生向けのコース。低学年のみんなはお父さん、お母さんと挑戦！ for family

挑戦状 弐 600円
～怪盗、狙う～
難易度2 ★★★★★
明治村の謎解きに何度か挑戦したことのある方にオススメ！

挑戦状 老 600円
～怪盗、現る～
難易度1 ★★★★★
明治村の謎解きは初めてという方に最適！

挑戦状 参 600円
～怪盗、欺く～
難易度3 ★★★★★
「難しい謎ほど燃える！」という方はコチラ！

5.20 Sat始動！

挑戦状 四 1,100円
～怪盗、潜む～
難易度4 ★★★★★
挑戦状 参 をクリアした方だけが挑戦できるコース。
※挑戦するには解決印の押された挑戦状 参 が必要です。

挑戦状 五 1,100円
～怪盗、消える～
難易度5 ★★★★★
挑戦状 四 をクリアした方だけが挑戦できる最難関コース。クリアに要する時間は計り知れない。
※挑戦するには解決印の押された 挑戦状 四 が必要です。

賞品が当たるチャンス！	挑戦状 老 以上のコースをクリアした方に、抽選でステキな賞品をプレゼント！
全コースクリアキャンペーン 5.20Sat.～	挑戦状 W～五 すべてをクリアした方にはオリジナル記念品をプレゼント！【先着1,000名様】

明治探偵GAME コラボメニュー

明治小五郎たちをイメージしたメニューをご用意しました！
3月4日(土)～6月25日(日)
※売り切れの際は、ご容赦願います

東海明子のフルーツケーキ <5丁目 帝国ホテル喫茶室> 500円
ヒロインの東海明子が、優雅にティータイムする際の、フルーツたっぷりケーキです。

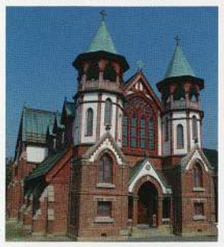
怪盗ジダイのブラックパオンデロー(コーヒー付) <4丁目 食通楽のカフェ> 680円
怪盗ジダイをイメージさせる、黒胡麻パオンデロー・黒バニラ・コーヒーのセットです。

小五郎とワガハイのねこまんま 2017 <3丁目 めん処 なごや亀> 880円
小五郎の愛猫「ワガハイ」も好んで食べたねこまんまに、鶏そぼろ肉とかにかまを新たにトッピングした2017年バージョンです。

たからふる ～明治村の重要文化財展～

西園寺公望別邸「坐漁荘」が重要文化財に指定されたことを記念して、博物館明治村所蔵のお宝「重要文化財」をフルにご紹介します。通常では見られないお宝がフルフル！

西園寺公望別邸「坐漁荘」


聖ヨハネ教会堂

開催日／3月25日(土)～6月25日(日)
会　場／千早赤阪小学校講堂
時　間／10:00～17:00(入場は16:30まで)
入場料／高校生以上100円　※中学生以下 無料

おいしいお茶の入れ方セミナー

西園寺公望も嗜んだ茶の歴史、健康性などの知識や、お茶のおいしい入れ方の実演を通じて、お茶のある豊かな食生活を伝えるセミナーを開催します。

ブラジル移民住宅竣工記念 ◆特別ガイド◆

開催日時／
4月28日(金)
13:30～15:00
4月29日(土・祝)・30日(日)
①10:30～12:00
②13:30～15:00
(所要時間約10分)

※ガイドの受付は、当日現地で開始10分前から先着順

たてもの修理工事現場見学 事前応募制

明治村の建築担当が工事現場をご案内。この時にしか見ることができない建物の様子をご覧ください。

▶長崎居留地二十五番館

開催日／4月15日(土)、5月20日(土)
時　間／13:30～(約60分)
参加費／500円
定　員／各日20名(事前応募制)
※応募方法は、明治村公式HPをご覧ください。

お問い合せ先　http://www.meijimura.com　または 0568-67-0314

学ぶ

夏目漱石生誕150年記念 漱石さんのお宅訪問！

3月25日(土)～

『漱石とその世界－写真・絵画・墨蹟集－』創藝社編より転載

夏目漱石が「吾輩は猫である」を執筆した住宅内の当時の様子を、文献などをもとに再現します。漱石になりきって写真を撮ったり、持参した本をのんびり読んだり、いろんな楽しみ方で漱石が住んだ家を満喫してください。

会　場／森鷗外・夏目漱石住宅

明治の偉人登場！

4月16日(日)～5月28日(日)の日曜日
夏目漱石など、明治時代に活躍した偉人が明治村に登場！見つけたら名刺をもらおう！
時　間／①12:00～ ②13:00～
③14:00～ ④15:00～

感じる

文明開化の音がする?! 蓄音機コンサート

3月25日(土)～6月25日(日)
ハイカラな音色に耳を澄ませてみませんか？

会　場／西郷從道邸
時　間／平　日：①11:40～ ②14:20～
土日祝：①11:40～ ②15:00～
各回約10分
※上記時間は建物ガイドを中止させていただきます。

あなたとつながる！ 電話交換体験

3月25日(土)～6月25日(日)
明治時代に活躍した電話交換手になりきって、明治時代の電話を体験しよう！

会　場／札幌電話交換局
時　間／平　日：①11:30～
土日祝：①11:30～
②13:30～
各回約10分

着る

明治時代の衣装を着てタイムトリップ！

受　付／明治体験処
ハイカラ衣装館
(安田銀行会津支店)

記念撮影コース
明治時代風のドレスや女学生姿、書生服に着替えて、気軽に記念撮影をしていただけます。
料　金／1回800円
(5分間、時間延長不可)
サイズ／身長100cm～
※サイズは衣装によって異なります。
※写真撮影はご自身のカメラでお楽しみください。
※衣装を着用しての飲食、村内散策はできません。

村内散策コース 雨天中止
明治時代風の衣装に身を包み、村内を散策できる長時間レンタルサービスです。
料　金／3,000円
定　員／1日先着10名様
サイズ／
女学生：150cm～165cm
書　生：150cm～175cm
※サイズ・数量に限りがあります。

食べる

食の明治維新 3月25日(土)～6月25日(日)

明治になり、日本に洋食文化が入ってきました。和洋折衷の「洋食」として大衆に浸透していくきっかけとなった海軍・陸軍のメニューを、明治村風にアレンジしてご紹介します。また、新登場の明治村オリジナルの「オムライス」や復刻版「カブトビール」もお楽しみいただけます。

入港ぜんざい
〈2丁目 京甘味処 なか井茶寮〉
650円

カブトビール
〈4丁目 デンキブラン 汐留バー〉
700円

ライスプリン
〈5丁目 明治の洋食屋オムライス＆グリル 浪漫亭〉400円

維新オムライス
〈5丁目 明治の洋食屋オムライス＆グリル 浪漫亭〉1,400円

歩兵第一聯隊のカツレツ
〈5丁目 明治の洋食屋オムライス＆グリル 浪漫亭〉1,400円

※数量限定でのご提供です。
※売り切れの際は、ご容赦願います。

参考文献：平間洋一、高森直史、齋藤義朗 著書「絶品！海軍グルメ物語」(新人物往来社)　協力：キッコーナ(株)

明治村茶会

明治の建築物を利用して開催するお茶会です。どなたでもお気軽にお申込みいただけます。

開催日／4月8日(土)・9日(日)
席　主／・坐漁荘・亦楽庵席(濃茶)　裏千家 今日庵
・学習院長官舎席(薄茶)　大西清右衛門美術館
・芝川又右衛門邸席(薄茶)　(一社)茶道裏千家淡交会 愛知支部連合会
参加費／18,000円(茶席3席、点心席、模擬店)
申　込／TEL(0568)67-0314「明治村茶会」係まで
締切り／3月25日(土)
※定員に達し次第、締切とさせていただきます。

着物でおトク！

着物でご来村されると入村料が500円に!!
この期間は着物で村内散策。
期　間／4月8日(土)～23日(日)

※浴衣・甚平・作務衣は対象外です。

3月4日(土) SL東京駅売店がリニューアルオープン！

明治村限定の雑貨やＳＬグッズ、帝国ホテルのオリジナルスイーツなど品揃えが豊富になって生まれ変わります。その他、レトロな小物や和雑貨なども随時入荷！ぜひお立ち寄りください♪

体重を量るということ

●2丁目17番地　清水医院

清水医院の診察室に、二種類の体重計が展示されていることをご存知ですか？（写真1）現在私たちが使用する体重計といえば、台に乗ると数字や目盛りで体重が何キログラムであるか表示されるものが一般的です。しかしこれらの体重計は、台に乗った人の重さを「おもり」を使い、手動でつりあいを取ることで計量するものです。現在も農工業用の計量器として使用されています。

写真1　清水医院に展示されている2つの体重計

まず、体重を量る人は台に乗り（あるいは椅子に座り）ます。そうすると、目盛りが記された「目盛りさお」が上に跳ね上がります。そこへ「増しおもり」を台にのせながら、「送りおもり」の位置を調整してつりあいを取ります。つりあいが取れたときの「増しおもり」の重さと、「送りおもり」の位置が示す目盛りの合計が体重となります（写真2）（注1）。

現在私たちが使用している長さや重さの単位は、十八世紀末にフランスで定められた「メートル法」に基づいており、日本では明治時代から使われるようになります。それ以前は、体重を示す単位として、「貫」や「匁」といった単位が使用されていました。これらは、中国から伝わったとされる計量単位「尺貫法」に基づくもので、長さは「尺」や「寸」、重さは「貫」や「匁」という単位で表されます。

明治二十四（八九一）年に度量衡法が公布され、一尺＝三十三分の一〇メートル（約三〇・三〇三センチ）、一貫＝一〇〇〇匁＝三・七五キログラムと定められたことで、尺貫法に加えてメートル法も単位の基準となりました（注2）。

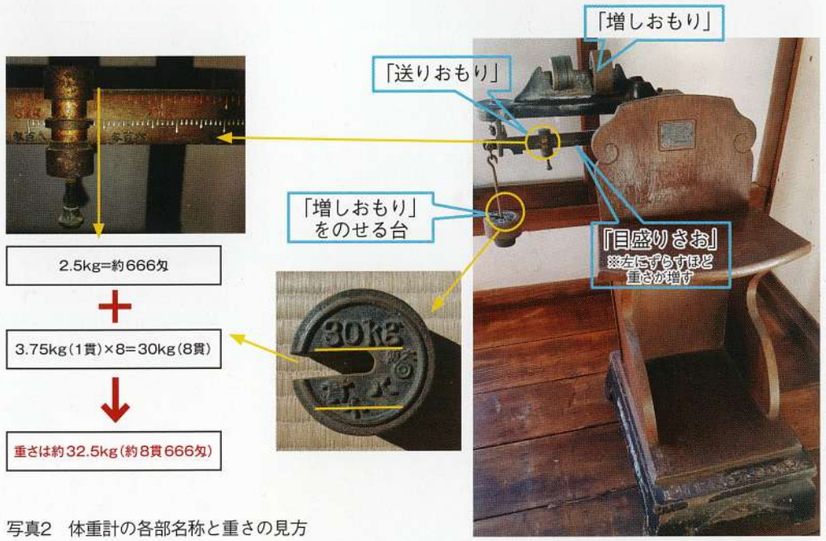


写真2　体重計の各部名称と重さの見方

当時体重計は現在のように普及はしておらず、明治九（一八七六）年、「体の量目をはかる器械」が上野公園に登場したことが新聞の記事として話題になったほどでした。しかし、夏目漱石や正岡子規といった部の偉人たちの体重が現在に伝わっているのは、明治時代に学校で身体測定が行なわれるようになったことがその一因です（注3）。

学校教育における身体測定は、明治十一（一八七八）年に、日本の教育に体操を導入するために設立された体操伝習所を中心に行なわれた「活力検査」がその始まりとされています。体操によって身体の発育にどの程度効果があるのかを測定するために、身長や胸囲、握力をはじめ、体重も測定されました。その後明治三十（一八九七）年に出された訓令によって、学生たちの発育や健康状態を把握するための検査、「身体検査」として行なわれるようになります。明治二十三（一八九〇）年三月、第一高等中学校在学中で二十代前半であった夏目漱石は、体重が十四貫二百匁、約五十三キログラムでした。

このように、体重計を使って体重を量ることは、現在私たちが健康管理のため日常的に行なう何気ない行為ですが、明治時代を振り返ってみると、量り方や量るときの単位、さらには量る目的においても、その始まりは現在とは異なるものでした。残念ながら、清水医院に展示されている体重計はご利用いただけませんが、自分の体重と明治の人たちの体重とを数字で比べてみる、というのも時代を体感するひとつの方法かもしれません。

注釈

（注1）各部の名称は、国立研究開発法人 産業技術総合研究所 計量標準総合センター 工学計測標準研究部門による「基準台手動はかり検査方法」を参照し、現行のものを使用しています。

（注2）大正十（一九二一）年の度量衡法改正によってメートル法への統一が規定されます。

（注3）明治時代に身体測定が行なわれた事例として徴兵検査も挙げられますが、ここでは、現在も一般的に行なわれている、学校教育における身体測定について取り上げます。

参考文献

・江戸東京博物館・東北大学編『文豪・夏目漱石そのこころとまなざし』朝日新聞社 二〇〇七

・河野誠哉「測定」の認識論的基盤―明治・大正期の学校身体検査を題材に―」『東京大学大学院教育学研究科紀要 三十七巻』東京大学大学院教育学研究科 一九九七

・篠田達明『日本史有名人の身体測定』株式会社KADOKAWA 二〇一六

・林丈二『型録・ちょっと昔の生活雑貨』昌文館 一九九八

店先の商売道具

●2丁目18番地　東松家住宅

二階に茶室を設けた木造三階建ての東松家住宅が、油問屋から銀行業へ転じた商家であることをご存知の方も多いかと思いますが、その店先に展示されている油販売用の道具（写真1）をゆっくりご覧になったことのある方は、あまり多くないのではないでしょうか。今回はここに展示されている道具をご紹介し、明治時代の油販売の様子を見ていきたいと思います。

写真1　油販売道具

さて道具をご紹介する前に、東松家住宅ではどのような油が販売されていたのでしょうか？東松家の屋号は「油松」で、旧所在地である船入町で灯火用の油を販売していた油問屋でした。明治三十一年に発行された『風俗画報』一六六号には、当時の油について次のように記されています。

「あぶら、もと膏脂の称なりしが、転じて油をいうに至れり。炙り取るの意といい、或いは溢るの義ともいえり。その種類は一ならざれども、従来民間に於いて専ら灯火の料に用いたるは、菜種の油にてこれを種油またはとぼし油とも称せり。」（注1）

このように灯火用の油として使われていたのは主に菜種油であり「種油」や「とぼし油」と呼ばれていたようです。

では、店先に置かれた油販売道具を見ていきましょう。展示されている販売道具は東松家で使用されていたものではなく、京都で使用されていた道具を再現として展示しています。

三段に分けられた棚には大きさや素材の異なる桶と、柄杓、枡などが置かれています。まずは木製の桶を見てみましょう。

❶大きさは三種類ありますが、蓋を開けてみるとどれも内側に和紙が貼られています（写真2）。明治時代、菜種油を入れる油桶は三重県で多く作られており、その桶は内側に和紙を二枚重ねで貼り付け、その上に柿渋を塗っていたそうです。

写真2　桶の内側

新しい菜種油には不純物や水分を多く含んでいたので、この桶にいれて静置することで沈殿させ、上澄みの油のみを汲んで販売していました。

❷中央の段にあるものは鉄製の桶で、持ち上げるとずっしりと重く、ここに油が入っていたら持ち上げるのにも一苦労しただろうことが想像されます。

❸上段にあるものは先ほどの鉄製桶に対して、ブリキ製なので非常に軽いです。このような金属製の桶は明治の中ごろになってから一般的に使用されるようになりました。

❹量り売りの際に使われた金属製の計量カップです。大きさは直径約十四センチメートル、深さは約十三・五センチメートルなので、一升よりやや多く入るサイズです。現在の料理用計量カップとほとんど同じ形をしており、親近感が沸いてきます。

❺柄杓が三種類あります（写真3）。油をすくう部分はほとんど同じ大きさですが、柄の長さが少しずつ異なります。油桶の大きさや、残っている油の量に合わせて柄杓を使い分けていたことが想像できます。

写真3　柄杓

❻四種類の枡が置かれています（写真4）。枡にはそれぞれ内容量が刻印されており、柄がついているものは一合、それ以外のものは、一升枡に一合と五合を入れて展示しています。この枡で量った油を糸のように細く垂らし、こぼれないように注ぐのが油屋の技術の見せどころでした。

写真4　枡

さらに土間を進んでいくと、五つの桶が重ねられています（写真5）。これらの桶には籐の持ち手がはめられており、「龍」「虎」「文」「福」「行」と、それぞれ異なる文字が彫られています。この文字の意味は諸説あるようですが、桶のサイズは全て同じですので、内容物を区別するための記号だったとも考えられます。

今回ご紹介したもの以外にも東松家住宅には当時の油問屋を再現するため、資料を展示しています。ぜひ間近でご覧いただき、明治時代の人々の生活に思いを馳せてみて下さい。

写真5
文字が彫られている桶

注釈

（注1）読み易さを考慮し、常用漢字、現代仮名遣いに改め適宜句読点を入れました。

参考文献

・三谷一馬『明治物売図聚』三樹出版 一九七七

・小泉和子編『桶と樽 脇役の日本史』法政大学出版局 二〇〇一